

# magis

St. Ignatius Church



『マジス』はラテン語で、イエズス会のモットー「神のより大いなる栄光のために」を表しています。

教会テーマ『勇気と寛大な心をもって出かけて行きなさい』(教皇フランシスコ)―「ミッション2030」―福音を伝える

## 訃報

R.I.P. 佐々木良晴 神父様

2012年4月から2018年3月まで当教会主任司祭を務められた佐々木良晴神父様は岐部修道院で病氣療養中でしたが、5月23日(水)午前4時に帰天されました。享年75歳、イエズス会生活51年でした。通夜は5月28日(月)、葬儀は5月29日(火)に執り行われました。みなさま神父様の司牧活動に感謝し、お祈りください。

## 2人の司祭を偲んで

二人の親しい司祭が突然、帰天しました。昨日まで話をしていた人が何のお別れのあいさつをすることもなしに、突然逝ってしまわれて、ただただ啞然としていました。また何の引継もなかったので、仕事の穴埋めをするのに必死で、心から悼むこともできない状況でした。二人の葬儀が終わり、少しずつ日常の生活に戻りつつあります。

ケルクマン神父と佐々木神父、現助任司祭と前主任司祭、大きな体と小さな体、社交的で人とかかわるのが好きなタイプと内向的で一人でひっそりとするのが好きなタイプ。大小、動静、いろいろな点で対照的な二人でした。

ケルクマン神父は教会に来るまで、さまざまな仕事をしていました。宣教師として、日本に来られ、最初は長らく中高で英語を教えていました。最初の学校では、楽しく充実した日々を過ごしておられました。ところが、その次に行った学校は難しい問題が山積し、とても苦勞した時代でした。50歳を超えて信仰の危機にまで発展して、辛かったと述懐しておられました。その後、雇われ校長でカトリック女子校の校長先生をされました。その地域は組合の強い地域のため、組合との戦いに巻き込まれ身も心も消耗されました。さらに思いもかけず、イエズス会会計の責任者の仕事に就くことになりました。これも大きな重荷でした。その頃は一緒に暮らしていましたが、彼が朝食を食べているときから、大きなため息を何回もついていて、どんなに毎日が大変なのかが察せられて、本当に気の毒でした。

最後の1年はこの教会で働きました。この1年は彼にとって最も慰めに満ちた日々でした。毎日のミサ・結婚関係・英語グループ・入門講座など、どれも司祭として充実した仕事でした。朝食の時のため息が鼻歌に変わっていたので、幸福な日々を過ごしていたことはたしかでした。最後の1年を幸せに過ごすことができたのは、まさに皆さんの暖かいかわりだったのは間違いありません。皆さん、どうもありがとうございました。

佐々木神父は東京出身で、高校(赤坂にあった)の英語教師をしていました。通勤前にイグナチオ教会の

朝ミサに参加するうちに、神の呼びかけを聴き、イエズス会に入会しました。将来はスクリプトム(文筆業を専門にする仕事)のオリエンテーション(将来の仕事の方向性)を与えられていました。その頃から物静かなタイプだったのでしょうか。しかしながら、司祭叙階前にオリエンテーションが変わり、一生涯教会で働くことになりました。

彼が一番好んだのは幼稚園の仕事です。幼い子どもたちを眺めているのが、何よりも慰めてでした。イグナチオ教会の仕事が終わったら、また子どもたちの姿が見られる場所で働きたいとよく言っていました。

それが彼の司祭職の特質を表しているように思います。何かバリバリ行動するのではなく、ただそこにいて、じっと人びとの動きを眺めている。何を「すること」よりも、ただ「あること」の大切さを実践しておられました。神さまが私たちに願っているのは、まず神の愛を受けている存在だということに気づくことでしょう。マルタとマリア(ルカ10:38-42)の話思い出します。

賢明な判断力がある方なので、幼稚園の園長や理事長、他の責任ある立場を歴任されました。最後にイグナチオ教会の主任司祭になりました。ただ、「ある」ことを大切にされた佐々木神父にとって、この教会は大きすぎたのかもしれない。他の司祭を思いやりながら、自分にできることを精一杯やりすぎたために、最後は大きな病気になり、残された寿命を使い果たしてしまったようにも思えます。

多くの人がそうかもしれません。私たちの人生では、楽しいことやうれしいことよりも、辛いことや苦しいことの方が多いのかもしれません。二人の一生を見ると、辛いことの方が多かったようにも見えます。それが辛いものであっても、楽しいものであっても、与えられた仕事に全力を尽くしておられた姿は美しかったです。今は、感謝とねぎらいのことばが浮かんでくるだけです。

英 隆一朗 (はなふさりゅういちろう、主任司祭)

## 追悼 佐々木良晴 神父様



### 信徒と共に

大切な人を喪うということが、こんなにも辛く悲しいことなのか、生まれて初めて経験しています。未だに大きな喪失感と深い寂寥感の只中にいます。

まるで道元さんと良寛さんを足して二で割ったような神父様でした。内には厳しい修道性を秘め、外には穏やかでユーモア溢れる方でした。私達はその落差を大いに楽しみました。退院後間もないある日の神父様との会話。「弟子達は、二年余りイエス様と寝食を共にし、イエス様の空気を吸いながら成長し、最後は殉教まで頑張りました。私も、もっと神父様の空気を吸いたかった、学びたかった。」と申し上げましたら、神父様は、「酸欠になる！」と言われて、二人で大笑いしましたね。とても大病あがりとは思えないユーモアでした。これは三十数年前に初めてお会いした時から一貫して変わっていませんでした。当時神父様は下の六甲教会の助任司祭、私は上の六甲学院でイエズス会の神学生として働いていました。あの頃はお互いに働き盛りで、実に楽しかったですね。

神父様が入院されたとき、私が一番最初に感じたことは、「御聖体が消えた」ような淋しさでした。それほど神父様の存在は、私達の教会にとって大きいものでした。日曜日の朝、教会の門の前でお姿を見るだけで、見守られているという安心感がありました。これは大変大きい事でした。今はもうそのお姿を見ることが出来ません。本当に淋しいです。

「信徒と共に」が神父様のモットーでした。全て信徒に任せる。同時に見守る。余程の事が無い限り御自分の意見を申されたり、ましてや信徒をコントロールされることは全く有りませんでした。おかげで私達は、任せられた責任を感じつつも、自由に伸び伸びと働くことが出来ました。神父様は「真の牧者」でした。大きな教会にもかかわらず、この六年間は、静かで非常に落ち着いた教会でした。神父様の「寡黙で静かな霊性」が浸み亘っていました。年齢より遙かに成熟しておられると感じました。

また、様子を見ながら、時間をかけて、ゆっくりと教会の組織や活動を改変されました。財務・施設・広報・諸活動や諸行事など、全てがすっきり整いました。気がつけば、いつの間にか私達は「佐々木カラー」に染まっていました。神父様はどここの教会に赴任されても、イエズス会の精神マジス（Magis：更にもっと）を発揮されて、より良い教会にして、次の任地へ赴かれました。「真のイエズス会士」だと思いました。

僅か一ヶ月の間に、二度の大手術をなさいました。その年齢とその小さなお身体で、よく頑張られたと思います。十一キロ痩せたと言われました。でも最後は、精根尽き果てて、私達の教会のために命まで捧げて下さいました。本当に、ほんとうに……。

退院後は、「明日から新しい自分を生きる」と覚悟しておられました。しかし散歩や買い物にお伴したときには、深刻な病状にもかかわらず、いつもより一層穏やかで柔和なお顔でした。話題も普段通りでした。抜け切っておられるようでした。

「お遍路にもう一度行きたい。そのためにリハビリに励んでいます。」と最後まで言っておられました。それも叶いませんでしたね。でも神父様、御休心下さい。神父様のお写真を胸に、頂いた巡礼杖と共に、来年春と一緒に歩きましょう。楽しみにして下さい。

「ミサを大切にして下さい。ミサは信仰の原点です。」「私達の信仰は素朴でいいのです。神様に願いを求めるだけでいいのです。」神父様のこのお言葉を胸に、これからの信仰を生きて参ります。

佐々木良晴神父様、私達の教会に来て下さいまして本当に有り難うございました。神父様と御一緒に過ごせました六年間は真に幸せでした。心から感謝を申し上げます。安らかにお眠り下さい。そして私達の教会を天国からお見守りください。合掌。

古川清志

## 追悼 ギュンタ ケルクマン 神父様



### 「従順」という生き方

私がケルクマン神父さまに初めてお会いしたのは約7年前。文学や演劇や芸術がお好きだった神父さまは、ご自分でもエッセイや詩、童話、脚本などを書いていらっしゃいました。しかしその多くは公にされていなかったので、「せつかくだからどこかで発表しませんか」と申し上げたのがご縁の始まりです。そうして雑誌『カトリック生活』（ドン・ボスコ社）の連載がスタートし、以来、私は日本語の原稿を作るお手伝いをしながらさまざまな話を聞かせて頂きました。それはかけがえのない宝ものです。

ケルクマン神父さまが「神父になりたい」と思われたのは、幼稚園に入る少し前のこと。お母さまに「聖櫃のなかにはイエスさまがいらっしゃる」と教えられ、「イエスさまに会ってみたい。神父になったら、聖櫃の扉を開けてイエスさまの近くに行くことができる！」と思ったのだそうです。小学校に上がるとミサの侍者を務めるようになり、三年生のときにはラテン語ミサのテキストを覚えて、一言も間違えずに唱えられるようになっていました。動機は子どもらしい無邪気なものだったかもしれませんが、司祭になる道はすでに調えられていたのです。高校卒業後の1963年、イエズス会に入会。67年に日本に派遣され、74年に聖イグナチオ教会旧聖堂で司祭に叙階されました。

その後は神戸の六甲学院、福岡の泰星学園（現・上智福岡中高等学校）、瀬戸の聖カピタニオ女子高校で、教諭、理事長、校長などを歴任。2010年からはイエズス会日本管区の財務を担当され、そして2017年4月、聖イグナチオ教会の助任司祭になられました。もともと小教区で司牧することが夢だったそうですから、叙階43年目にしてようやく夢が実現したわけです。とても嬉しそうに「教会に来る人は何を求めているのだろうか。どんなことに悩んでいるのだろうか」と、入門講座のカリキュラムを何度も作り直して、入念な準備されていたことが思い出されます。

教会で司牧をしたいという「夢」と、長年、教職や管理職を務めてこられたという「現実」。私は「そのギャップに葛藤や戸惑いはなかったのだろうか」と思い、尋ねたことがあります。そのときケルクマン神父さまは、「私たち修道者には『従順』の誓願があるから」と、ご自身が考えている「従順」について話してくださいました。

「私は小さな人間で、経験も浅いし視野も狭い。だから自分の望みがかならずしも正しい道であるとは限らない。イエズス会が私を客観的に見て教師に適していると判断したのなら、それが私にとってのより良い道であるはず。また私自身、他者や社会から必要とされる場で働きたいと願ってきた。財務の経験はなかったけれど、そこに人材が必要で私に声がかかったのなら、私はその任を負うべきだと思った。教職も管理職も私自身の希望ではなかったけれど、だからといって嫌々やってきたわけではない。命令に盲従したわけでもない。前向きに受け入れて、喜びをもって働いてきた。結果としてどうだったかといえは、やはり良い道だった。修道者でなくてもそうやって従順に生きることができたら、だれもがきっと喜びに満ちた一生を送れるはず」

神父さまの心のなかにも、葛藤や戸惑いが湧く瞬間はあったのかもしれませんが、50年前の来日直後には、日本での宣教の厳しさを目の当たりにして「人生最大の危機を感じ」、教員時代には深い悩みを抱えて「光の見えない真っ暗闇」の時期があったといいます。人の一生というものがおしなべてそうであるように、神父さまの人生も山あり谷ありだったに違いありません。まして、昨年のクリスマス頃から体調が非常に悪かったそうですから、この数か月はどれほど辛く苦しい日々だったかと思えます。でも、私の記憶の中にある神父さまは、穏やかでやさしいあたたかい笑顔なのです。それは、どんなときもどんなことに対しても神父さまが前向きに取り組みられ、実際に希望と喜びを見出して生き続けていらしたからだと思うのです。

教会での司牧生活はわずか1年数か月でした。でも、ケルクマン神父さまは私たち一人ひとりの心のなかに、たくさんの信仰の種を蒔いてくださったと思います。その種を大切に育てながら、喜びと希望とともに日々を歩み、最期のときに「良い人生だった」と笑顔で言うことができたなら、きっと天国の神父さまはあのやさしい笑顔で喜んでくださるのではないのでしょうか。

マリア・リタ・テレジア 星野和子

## 7月の共同祈願

ご病気や時間がとれないために、今日、ミサに与れない方々のために祈ります。慈しみ深い神は、どんな時にも、どんな方にも、いつも変わらぬ愛を与えてくださいます。

すべての人々が、豊かな御恵みに満たされて、明日への希望のうちに生きることができるようになりますように。

朝の祈りにおいて：恵みを思い、感謝しながら一日を始めよう

新しい朝を迎えて神に感謝し、今日一日ほほえみを忘れず、喜びをもって、必要とされているところで主の手足となることができるよう願ひましょう。

晩の祈りにおいて：今日一日をふりかえってみよう

自分に助けを求めている人に、手を差し出し、心を尽くして接することができましたか。自分が幸福の中にあっても、悩みを抱えている人たちのことを忘れることがありませんように。今日一日の恵みに感謝をささげましょう。

## 合同追悼ミサ

日時 7月7日(土) 10:00  
場所 聖イグナチオ教会 主聖堂

2017年6月から2018年5月までに帰天された当教会所属の信徒の方と、同期間に当教会でご葬儀をされたすべての方々のために、合同追悼ミサが行われます。ミサ終了後、テレジアホールにてお茶のご用意をいたしております。どうぞお立ち寄りください。

## 傾聴セミナー

日時 7月14日(土) 13:00 ~ 15:00  
場所 ヨセフホール  
テーマ 「傾聴とは」 講師 木村知子 氏

始めに「傾聴ルームについて」田丸篤神父様からお話があります。  
詳しくはポスター、チラシをご覧ください。

## 6月の宣教司牧評議会から

・ 佐々木前主任神父様、ケルクマン神父様のご帰天が相次いだ悲しみの中、二人の神父様を偲ぶ場を設け、内容を一部変更しながらの教会祭を6月2日(土)、3日(日)に開催しました。2日(土)は大掃除、3日(日)は「福音のよろこびをあげよう」というテーマのもと、カトリック教会に関心がある方々をお迎えする「Visitor's Café」や「福音の喜びをわかちあう集い」などの新企画を軸にした心温まる催しをいたしました。この他の催しも好評で、出展や変更にご協力していただいたみなさまに深く感謝いたします。

・ 頒布金204,282円は教会へ献金いたしました。ご協力ありがとうございました。

・ ひとつの信仰を持つ青年たちが世界中から集い、将来を担う若者に信頼と希望を託す「ワールドユースデー2019 パナマ大会」(1月開催)に、当教会から若手信徒を派遣(予定5名)することが承認されました。

・ 5月27日の「教会活動連絡会議」にて、2018年度の幹事4名が選出されました。(敬称略 50音順)

小川哲次(壮年会) 佐藤和央(はじめの一步)  
田中 聡(先唱グループ) 代永良江(手話サークルザーカイ)

## 新聖体奉仕者任命

4月1日(復活の主日)のミサで次の7名の方が新しく聖体奉仕者に任命されました。(敬称略 50音順)

内田和子 Sr. 杉原法子 芹川さなみ 高橋あかね  
高橋宏樹 永瀬英一 濱崎明美

## お知らせ

- ・ フローレス神父様は体調不良で本年3月から入退院をしながら病氣療養中ですが、暫くこの状態が続くと思われれます。フローレス神父様のご回復をお祈りください。
- ・ 2018年7月から2019年3月までの予定で酒井陽介神父様が協力司祭として赴任されます。

### ミサの時間 Mass

#### 【平日 Weekday】主聖堂 Main Chapel

7:00 / 12:00 / 18:00 (日本語)  
(土曜日 18:00 は主日ミサ)

#### 【日曜日 Sunday】主聖堂 Main Chapel

7:00 / 8:30 / 10:00 / 18:00 (日本語)  
12:00 (English) / 13:30 (Español)

#### 【月の第1日曜日 1st Sunday】

Main Chapel 15:00 (Việt Nam)  
Our Lady's Chapel 12:30 (Português) 16:00 (Polski)  
Xavier Chapel 16:00 (Indonesian)

#### 【月の第3日曜日 3rd Sunday】

Our Lady's Chapel 16:30 (Indonesian)

主任司祭：英 隆一朗

助任司祭：李 相源

田丸 篤

協力司祭：ヘネロソ・フローレス

ハビエル・ガラルダ

平林 冬樹

酒井 陽介

ブラザー：吉羽 弘明

シスター：イベッテ・サンチェス  
(セントロ・ロヨラ)

ローズ・レミジオ

(ジョン・デ・ブリッド イングリッシュセンター)

## カトリック麴町教会 (聖イグナチオ教会)

〒102-0083 千代田区麴町6-5-1

TEL 03-3263-4584 FAX 03-3263-4585

ホームページアドレス : <http://www.ignatius.gr.jp>